

ラグビーのボール に思うこと

岡 仁 詩



ラグビー競技規則第四条に「ボールBall」
ボールは四枚張りの楕円球で新しい時はでき
るだけ下記に近いものとする。長さ28mm~28
.6mm 縦の周囲65mm~79mm 横の周囲61cm~
65mm 重さ383g~425g と記されています。
この楕円球が私達ラグーマンを一喜一憂させ
るラグビーボールです。

このボールの形を初めて考え出した人はど
んな人だったのでしょうか。早大ラグビー部監
督大西鉄之祐著「ラグビー」の中に「ある文
献には、ローマ時代ボールを造るのに豚の勝
腕を乾してふくらまし、それを球技に使った
と書いてある。いろいろ調査研究してみたが
考え出した人はわからない。来朝したオック
スフォード、ケンブリッジの人々にも聞いた

がイギリスでも判然としていないらしい」と
書かれています。楕円形のボールはその生い
立ちからして謎に包まれており、創造者は地
下のどこかでその楕円球のイレギュラー・バ
ウンドに泣かされている私達を見てはほえん
でいるかもしれません。

どのスポーツでも精神のないスポーツはあ
りません。しかし、ラグビーほどその精神性
をやかましくいわれる競技も少ないでしょ
う。まんまるいボールに対するレジスタンス
で楕円形のボールが生まれたのか、豚の勝腕
をふくらましたのが偶々楕円であったのでそ
の伝統を一人守らんとしたのか、とにかく変
わりもののボールがそのままに現在のスポー
ツ界に於けるラグビーの位置を物語っている

ようです。オリンピック基金のための競輪
からの上げ銭々ということに、体協の中で独
り反対し、あらゆるスポーツが、リーグ制、
トーナメント制をとっているのにラグビーの
大学対抗だけは依然伝統の定期戦第一にゲー
ムが考えられます。良し悪しの問題ではなく
ラグビーがスポーツ界の変った位置にある
というのもまた楕円のボールの見えぬ糸に繰
られた宿命かとも思います。ラグビーのポー
ルのバウンドが不規則なことはいうまでもあ
りませんが、蹴りかたによって、そのバウン
ドのある程度は予測することができます。

戦後直ぐに当時の全日本の事実上の王座を
決定する明治OBとK・Y・R・Cのゲーム
で、K・YのAが明治OBの蹴ったボールを
追いかけた時そのボールがバウンドする寸
前、AのうしろにいたK・YのBが、A/
そのボール、もどるぞくと叫びました。その
声に反射的にボールの落下地点の前方ヘダッ
シュしたAの胸にそのボールは見事に収まっ
たのです。思わずあがる歓声、私は当時中学
四年生でラグビーが少しわかりかけてきた時
だけに、これはラグビーの神様の集まりだと
感激したものです。しかしある産科の医者

が、生まれてくる子供の性別をあてるのは非常に率がよい。確率は二分の一だ、といました。ラグビーのボールも全く真直ぐ縦に回転していれば、バウンドしたとき、前か後ろしか転がりません。フラフラと尻が振れているようなキックではそれはいえません。二分の一の確率をゲームの一番大事は時に、ずばりもどろぞろ々といいきる信念、その信念は自己が全力を尽していてこそ初めていい得ることであり、そしてそれがあの楯円球をして人間の意志に従わしめたような気もいたします。

昨年、明治とのゲームで同志社が三年連続学生王座の夢を破られたのは、やはり楯円のボールの成せる業でした。ゲームの後半、明治SO北島君が同志社のスクラムサイド烈しいディフェンスに追いつめられて、盲滅法と思えるキックを同志社のイン・ゴールへあげました。そしてそのボールはイン・ゴールへ落ちて、それを待ち構えていた同志社FBをあざ笑うが如く大きく高くバウンドしてイン・フィールドの方へもどったのです。その時、明治WTB原君ただ一人猛然とダッシュしてきており、その腕にすっぽり入りそのまま倒れこまれ、決定的な五点となり、結局は二

点差に泣きました。全く同志社にとってアンラッキーなバウンドでした。しかし必ずしも偶然とはいえない要素は多分にありました。まずその第一は、追いつめられたキックとはいえ、北島君のキックが非常に高く大きかったことです。ラグビーに於いてボールの所有権ほど大切なものはありません。いくら押しに押し地域的にいかに前進していてもボールを味方の手に持つていなければトライはできません。その意味では、キックはボールの所有を放棄するという点に於いて必ずしも秀れた戦法とはいえないのです。しかし、自分一人での味方のFWの後ろでタックルされることは敵の前進を許し、敵にボールを渡す確率が非常に多くなります。その時味方が後ろから走って間に合う大きな高いキックをあげることはそのボールの獲得率を敵味方五分五分にします。北島君のキックはキックした地点は悪かったが少なくとも高く大きくというキックの一つの条件が充たされていたのです。つぎに敵のイン・ゴールへ落ちるボールに対してノー・バウンドではとても間に合わないのを承知で、しかも緊迫したゲームで身心ともに疲労している時になかなか走れぬものです。ド

ロップ・アウトになる率は非常に高いのです。しかし率は高くとも一〇〇%ではないことも事実です。それが楯円球のもつ可能性です。明治フィフティーンのうちただ一人原君がダッシュしたその執念、微々たる可能性に対しても全力を尽したことがやはり楯円のボールを自分の意志に従わしめた勝利でしょう。同志社フィフティーンにはその執念がたらなかつたのでしよう。ボールがバウンドした時そこに走っていつていた。それが明治の決勝点を生んだ第二の要素といえると思います。

こうして楯円のボールは私達にまた新たな教訓を与えてくれました。よりよきラグーマンを造るのは監督でもなければ上級生でもない。このイレギュラーな楯円のボールがオリエンテイションとなり、自分自身が求めることにより、成長していくものだと思います。新しいシーズンを目前に控えて、八月二十一日より信州管平にて合宿練習に入りますが、今シーズンはこの楯円のボールを相手チーム以上にどれだけ征服できるか、イレギュラーな楯円球の持つ可能性の限界へ挑戦していきたいと思っております。

(文学部講師・大学ラグビー部監督)